

禿仁志先生を偲んで

千本 真生

Memories of Professor Hitoshi Kamuro (1947-2016)

Masao SEMMOTO

禿仁志先生（東海大学名誉教授）は2016年10月8日に、悪性リンパ腫により入院先の国立がん研究センター中央病院において永眠された。3年にわたる闘病生活の末、最後は駆け抜けるようにして彼岸へと旅立たれてしまった。68年の生涯であった。あまりにも早い最期にまだ心の整理が追いつかない。先生を偲び、学恩の数々に謝意を表しつつ、ここに改めてご冥福をお祈りしたい。

禿先生は1947年10月19日、神奈川県のお生まれで、横浜市内で幼少期を過ごされた。県立希望ヶ丘高等学校を卒業し、1966年に東京教育大学文学部に入学、考古学を専攻されている。1971年に同大学院へ進学したのち、筑波大学歴史・人類学系の技官、東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の研究生を経て、1985年に東海大学文学部史学科考古学専攻に、非常勤講師として着任された。1986年には同大学の専任助教教授に、1997年には教授に昇任され、そして2014年からの3年間は特任教授とられて教鞭を執り続けてこられた。

禿先生の卒業論文は、縄文時代の石鏃と生業を題材にしたものであったと記憶している。学部生時代に参加した東京湾岸に位置する貝塚遺跡での発掘調査が契機となったにちがいない。大学院に進学した当初も狩猟採集民に関する研究を進めるつもりであったが、増田精一先生を団長とするイラン遺跡調査団の一員として、1971年の夏にタペ・サンギチャハマック遺跡（Tappeh Sang-e Chakhmaq）の発掘調査に従事されている。先生にとって初めての海外調査であった。イラン調査にはその後1975年までに二度参加しておられる。海外調査は若かりし日の先生にとってたいへん刺激的であり、学問的な関心を日本の縄文時代から西アジアの新石器時代に向けさせるには十分であった。これを機にイラン先史土器の編年研究を修士論文のテーマに選ばれ、ご自身の歩もうとする道も定められたのだと思う。

イラン調査後の約10年間は、海外の発掘現場から遠ざかった。先生の研究経歴をおおまかに3時期に区分するとしたら、黎明期に当たるイラン時代のあとに続く第2期は、放浪時代とでも形容できようか。体力も気力も旺盛であった20代後半から30代前半にかけて、西アジアから、南アジア、東南アジア、中央アジアへと足をのばし、各地

の遺跡や名勝を訪れながら、現地に住む人々の生活と文化にじかに触れ、見聞を広められた。この時期に「アルケ（歩け）オロジー」を十二分に体現し、研究生活を通して経済的には最も困難な時期であったが、それと同時に最も充実した時間を過ごすことができた、にこやかに述べられていた先生の表情はいまでも忘れられない。

東海大学に赴任されたときに、フィールドの舞台を西アジアのイランから南東ヨーロッパのブルガリアに移されている。赴任先ではちょうどブルガリアでの遺跡調査計画が緒についたばかりであった。当時は今ほど、海外の先史時代遺跡を長期に調査した経験をもつ若手研究者が多くなかったため、先生はブルガリア調査にうってつけの人材として考古学研究室に迎えられることになった。調査の詳細な経緯については、先生がご自身でまとめられているが（禿 2004, 2009）、当時のブルガリア政府が「トラキア民族の起源と形成」という壮大なテーマを掲げ、東海大学との共同調査が学術文化交流協定という形で計画された。そして、同国南部に位置するデャドヴォ遺跡（Dyadovo）（テル型集落）で、青銅器時代集落を対象にした発掘調査が本格的に進められていったのである。

先生の西アジアでのフィールド経験は、ブルガリア調査でもいかに発揮されたと思う。1985年に尚樹啓太郎先生（ピサンツ史）が代表をつとめる発掘調査（第2次調査）にはじめて参画してから、調査団の一員として着実に仕事をこなされた。持ち前の几帳面な性格がにじみ出る図面や、一目で先生のものとなる文字でびっしりと埋められた調査日誌が数多く残されている。また、例によって旅好きの先生は調査のあとに必ずバルカン諸国を歩き回った。西アジアでの経験が長かった先生にとって馴染みの少ない東欧の歴史と文化を現場から学び、ブルガリアでの調査に活かそうとされたのだと思う。

1997年に調査団団長の任を前任の関根孝夫先生（日本考古学）から引き継がれ、最後の最後まで陣頭指揮に当たられた。一シーズンの調査期間は決して長くなかったものの、1984年の第1次調査から23回の発掘調査を重ねた。ヨーロッパの一遺跡を日本の調査隊が主体となって、長年にわたる調査を継続して実施してきた稀有な例である。

まさにこうした点にこそ、禿先生が実施されたデャドヴォ遺跡調査のもっとも大きな貢献があると思う。たとえ短期であっても、海外調査を思い通りに運営していくことは容易なことではない。それを10年以上も継続させることはなお一層難しい。先生ご自身も近年の不安定な世界情勢と海外の遺跡調査を取り巻く厳しい環境を憂いていたが、西アジアのほど近く、ヨーロッパの片隅で日本隊がブルガリア考古学に関わり続けていくことを可能にしたことは、先生のすばらしい事績の一つである。禿先生は先代の団長にならい、丹念に遺跡を調査して、基礎資料を蓄積し、着実に成果を提示してきた。日本隊が積み重ねてきた調査成果は、すでに現地の研究者にもひろく受け入れられている。いずれ全データをまとめた報告書が公表されたあかつきには、ブルガリア考古学の発展におおきく寄与することになると信じてやまない。

そして、いま一つ、先生のデャドヴォ調査における功績を挙げるとするならば、前期青銅器時代集落構造の解明であろう。日本隊の調査区だけでは資料的制約があって集落全体の様相まではつまびらかにすることはできなかったものの、自ら発掘を手掛けた資料に基づいて「住居分散型モデル」を提示された。ブルガリアでは該期の集落研究が乏しく、集落の実態解明にはなお不明な点が数多く残されている。こうした状況下で先生が示されたモデルは、ブルガリア前期青銅器時代に特有の集落構造の理解を深めることに成功している。

筆者が先生に最初にお会いしたのは、先生が調査団の団



デャドヴォ遺跡の調査中に休憩をとられる禿仁志先生
(2003年8月撮影)

長としてはじめてデャドヴォ遺跡調査の3ヶ年計画にとり組まれているときだった。はじめて研究室の扉を叩くときの緊張感をいまでも覚えている。このころは図面の整理作業に使うようなパソコンは研究室に一台もなかった。その代わりに、ロットリングやインレタ、スプレー糊などを使っての報告書作りが、連日夜遅くまで賑やかに研究室で繰り広げられていた。なによりも、学生と肩を並べて、先生自ら図面の整理にとり組まれている姿は印象的であった。いまではすっかりロットリングを握ることもなくなった筆者にとって、心に残る研究室での一幕である。

幸いなことに筆者は卒業論文から博士論文の作成まで、先生のご指導を仰ぐことができた。現地のことは現地で学ぶようにと、ブルガリアへの留学も先生からの強い勧めであった。デャドヴォ遺跡の調査では、海外調査の心得だけでなく、他分野の研究者と寝食をともにする機会を通じて、耳学問ながらも学際的研究の重要性を肌で感じる機会に恵まれた。また、調査旅行では先生のあとについて、北はキエフ、南はテッサロニキとエーゲ海の島々にいたる地域を巡見し、各地の遺跡や博物館を訪れるなどして、先生流の旅の仕方を教わった。そして、結果的には、禿先生に導かれるようにして、ヨーロッパ・バルカン地域の考古学研究への道を進み、博士論文ではデャドヴォ遺跡の調査資料を存分に使わせて頂いた。それでもなかなか成長しない筆者であるが、先生には最後の最後まで寛大な心で接して頂いた。

振り返ってみると、研究者としての先生は常に厳しい姿勢で臨まれていたが、教育者としての先生は大変温厚なお人柄であった。筆者が厚かましい言動をとったときでも、やんわりとたしなめることが多かった。厳しい言葉を投げ掛けられることもなくはなかったが、ほとんど記憶にない。また、先生は上から下へものごとを一方的に教え込むというような姿勢はとられなかった。つねに学生に考えさせること、気付きを促すことに心を砕いていたように思う。ただし、先生の駄洒落に気付かなかったときには、たちまち表情が曇ってしまわれたので、すぐに気付きを促されたこともしばしばであったが、そうした側面を垣間見せることも先生の魅力の一つであった。

禿先生は大学の職を退いたあと、デャドヴォ遺跡の調査報告書の作成に勤しむ心づもりをされていた。一日の通勤に5時間以上を要した生活から解放され、じっくりと腰を据えてことにあたるつもりであったが、それも叶わなかった。病床でデャドヴォ遺跡調査の行く末を案ずる先生から報告書作成にむけて最後のご指導を賜った。その任が筆者の貧弱な肩にはあまりにも重いことは、先生も承知の上であったはずである。あのときのように先生と肩を並べて作業する時間をもう過ごすことはできない。先生に教わった

ことを胸に、遅々としてでも着実に報告書の完成をめざし、先生の墓前にご報告をする時を迎えられるよう事を進めていきたい。その日がくるまで、先生にはどうか好きな鰻を存分に楽しんでもらいながら待っていてほしいと思う次第である。

参考文献

- 禿 仁志 2004 『デヤドヴォ発掘』東海大学トラキア発掘調査団。
禿 仁志 2009 「東海大学のブルガリア調査—2000年以降—」東海大学文学部考古学研究室（編）『日々の考古学2』445-458頁 六一書房。

千本 真生

Masao SEMMOTO

公益財団法人 古代オリエント博物館／東海大学文学部
The Ancient Orient Museum, Tokyo/
School of Letters, Tokai University